

魅せるけん玉

全日本けん玉道
パフォーマンス大会で初優勝



くぼた・さとる
久保田 悟さん
(15歳・原)

5歳からけん玉を始め、小学3年生の時に20歳以下の最高位5段を取得。平成20年には、5種目の技を成功する早さを競う「タイム競技の部」優勝、もしかめを続ける時間を競う「全国もしかめ選手権」優勝のほか、平成22年には大学生と組んで、「全日本けん玉道チームチャンピオンシップ」でも優勝するなど、数多くの大会で優秀な成績を残し、日本の頂点に君臨している。

発祥の地の看板背負い、
日本の頂点に君臨する

このまちには、けん玉日本一の高校生がいる。廿日市高校1年生、久保田悟さんだ。10月7日に札幌市で行われた「全日本けん玉道パフォーマンス大会」で日本一の座についた。

自由な演技構成で競う同大会、個人とチーム計11組が、3分の制限時間で競った。けん玉の種類、数、大きさ、糸の長さなどすべて自由。構成には3カ月をかけ、曲選びから慎重に練り上げた。日本で唯一久保田さんだけができるという、けん玉の中皿を指に乗せ、回転させ続ける技や、ひもなしの玉を同時に2個使う技など50種類以上を盛り込んだ。「技だけでは優勝はできません。音楽の盛り上げる瞬間に大技を決めるなど、曲とタイミング、

そして技の構成が重要ですよ」と久保田さん。

「緊張しませんでした」。ミスしたときの練習も繰り返したことが功を奏し、本番でのミスも演技のひとつに見せた。自己採点は85、90点というが、審査員や観客から大きな拍手を浴び、「創造性があり、楽しい演技」と評価を受けた。

パフォーマンス部門に挑戦して今年で2年目。昨年は準グランプリと、悔しい思いをした。「素直にうれいしです。次は2連覇を目指します」と、その表情は15歳の少年の顔に戻る。けん玉を始めたのは5歳のと

き。「左腕を骨折して、やるこ

とがなかったんです」と笑って話す。廿日市けん玉クラブの存在を知り、すぐに入会したという。そこで砂原さんの指導を受け、小学3年生のときには20歳以下の最高位5段を取得した。その後技の豊富さに魅了され続け、「スクリュードライバー」「こうもり」など自らあみ出したオリジナル技もある。

「このまちにはこんな人がいたんだ。自分もやってみよう」と思ってもらえるようになったんです。保育園にも教えるに行くことがあるという久保田さん。「しかし、中学を期にやめ

てしまう子が多いのが残念です」と語る。

通常の大会とパフォーマンス部門では、その質が全く異なる。「けん玉に興味のない人にも、パフォーマンスを見て振り向いてもらいたいです」と「魅せる」けん玉で、すそ野を広げていきたいと話す。

「このまちは、けん玉発祥の地です。そう考えると、見えなるところでいろいろ背負っているのかなと感じるときもありま

木工の未来へ



宮島彫りとけん玉、
伝統のコラボレーション。
木工の未来は、
無限に広がっている

けん玉に美しく彫刻された「桜」。実はけん玉の材料は、玉はサクラ、けんや皿胴はブナが使われている。そして「桜」は、誰もが快適に暮らし、豊かな文化が花開くまち・廿日市の象徴として、昭和63年に「市の木」に選定されている。

このけん玉は、廿日市市木材利用センターで西村保宣さんと鍋谷一也さんが製造したもの。それを宮島彫りの伝統工芸士・広川和男さんに市が依頼して完成したものだ。

このまちに存在するそれぞれの伝統や文化は、大きくなったまちで出会い、さらなる進化を遂げる。その可能性は、無限大。

木工作品ができるまでに、さまざまな人がその「木」と関わり、そして皆さん、誇りを持ってその仕事に取り組んでいる。

植えた木を切るためには三代かかると言われる林業。「昔、木を植えた人がいたからこそ、今、木を切ることができるんです。そして今植えている木は、まだ見ぬ次代の人達のためのものです」とは、取材先で言われた言葉。

まちづくりにも同じことがいえるのではないだろうか。次代を担う子どもたちが、誇りを持って暮らせるまちにするためには、今を生きるわたしたちが、大切なものを残していく努力が必要だ。そして、それぞれの役割を認めながら、お互いの持ち味を発揮すれば、そこに大きな価値や魅力を生み出すことができるはずだ。



写真1 パフォーマンス部門は、けん玉の種類、数などすべて自由。糸のついていない複数の玉をあやつり演技を披露する。手だけでなく足も使ったリフティングも技の中に取り入れている。写真2 けん玉の中皿を指に乗せ、回転させ続けることができるのは日本で久保田さんのみ。指の上で回転しているけん玉をほうり投げ、また指で受け止め直し続ける。